

フロイト理論のアメリカ社会学への影響

宇 賀 博

フロイトの精神分析は、こんにちのアメリカにおいて最も広くかつ盛んに研究されているものの一つである。その理論は、社会心理学や文化人類学といった社会科学の他の諸分野と同じく社会学の分野にも同様に大きな影響を与えている。しかし、他の諸分野でもそうであったろうが、社会学の分野では最初是一部の人びとを除いてかれの理論をひどく忌避したようであった。もっとも、こんにちでもこれほど盛んに研究されているながら、ある意味では逆にこれほど激しい反感を受けている学説も少ない。おそらく汎性説の故であろう。フロイトの精神分析がとくにアメリカで盛んだということは、それじたいだいな意味をもっているに違いない。社会学も「アメリカン・サイエンス」と一般に呼ばれている。アメリカという社会のもつ歴史的な構造が問題となろうが、わたくしはそれとの関連で追求する余裕をここではもち合わせていない。ただ、本稿では、フロイト理論がアメリカ社会学にどのような影響を与えているかといった点のみを論じてみたい。別のいい方をすると、フロイト理論はアメリカ社会学にはたしてどのような仕方で受け入れられているのであろうか。¹⁾

1

フロイト理論が、アメリカの学界へ公式に紹介されたのは**1909年**である。「アメリカ社会学会」が1906年に成立しているからその3年あとのことである。つまりこの年の秋、クラーク大学の創立20周年記念の式典に招かれてフロイトじしんが行った「精神分析の起源と発展」と題する連続講義によつてであったが、かれはこの講義で、

ある少女のケース・スタディをとり上げ、彼女のヒステリー症状を先天的な変質としてではなく心的決定論の原理でもって説明した。そして、フロイトは「抵抗」の概念や「願望」と夢の関係や「幼児性欲」説や「エディプス・コンプレックス」や「昇華」の機能など、いくつかの主要な概念について語った。この記念式典には、内外の著名な学者が多数出席していたからかれの理論はあまねく人の知るところとなったのである。当時クラーク大学の総長であったG・スタンレー・ホールの言葉によると、この記念式典はフロイト理論がアメリカで発展するためのイニシアル・モニュメントであったということである。²⁾

しかし、じつをいえば、ホールのこの言葉は社会学の分野についてよりも、アメリカの文学、教育、および心理学などの諸分野に妥当するといったほうがよいようである。社会学者のあいだでは、プロテスタント的な社会的背景というものに影響されてか、³⁾フロイト理論についての議論を一般に忌避したようである。フロイト理論と性(sex)とを同義的に解し、また「性」はかれらの研究の領域外とみなされていた。もっとも、それまでかかる問題にふれた書物もないではなかった。たとえば、W・I・タマスの『性と社会』(1907)やH・エリスの『性の心理学的研究』(1898)の二つの書物がそれであった。しかし一般的に言って、1909年から1919年頃にかけてはアメリカ社会学にとって、G・J・ヒンクルのいうように、⁴⁾フロイト理論を“用心深くためらった”時期であった。

アメリカ社会学にフロイト理論を受け入れる素地となったものはなんだろうか。おおまかにいっ

て、それは——ヒンクルが好んでつかうところの「主意主義的名目論」と呼ぶアメリカの精神的風土であった。この個人主義の精神的風土は、こんにち行為理論のかたちでみることができるが初期のアメリカ社会学ではL・F・ウォードの「社会力」(social forces)の概念に集約されるころであった。これは人間の“psychic nature”を社会現象の源泉と考えるのであるが、A・W・スモールのいうように「社会的であって精神的 (psychical) でないものはない」のであって、かれの説いた関心説とウォードの社会力の概念はE・A・ロスによって総合された。また、アメリカで最初の社会心理学の書物を著わしたのはこのロス(『社会心理学』1908)でであった。しかし、フロイト理論を受け入れる直接のきっかけは、なんといってもアメリカ社会の産業化や都市化とそれへの個人の不適応の結果と考えられた社会問題にあった。一般に社会問題を個人の不適応の結果として理解するところの主意主義的オリエンテーションに理論的にも実際的にもその可能性があったのではなかろうか。社会学の分野で、フロイト理論の可能性をいち早くに説いたのは、犯罪の問題にふれたG・S・ホルの「心理学の社会的諸相」(1913)という論文であったといわれている。その具体的な内容についてはよくは知らないが、これは1913年のアメリカ社会学会の会報(PABB, 7)にのせられたものであった。つづいてフロイトの理論にふれたのは、若干の期間をおいてではあるが、R・ゴールドとE・R・グローブスの二人であったようである。すなわち、ゴールドの「社会関係の心理学」(1917)とグローブスの「社会学と精神分析的心理学、フロイト仮説の解説」(1917)の論文がそれであって、ともに「アメリカ社会学雑誌」に掲載されたものであった。前者は、その年の3月にノースウエスタン大学でおこなった講義をまとめたものであり、フロイトの「無意識」の概念が紹介されている。後者については重要だからとくにあとで述べたい。1919年には、R・E・パークがニグロの行為を「願望」と夢の理論の立場から説明を企てたし(R・E・パーク、「教育、諸文化の葛藤や融合との関係」PASS, 13, 1919, pp.38-63),

また、U・G・ウエザーリイは、政治の領域で、フロイトの「無意識」や「願望」の理論を引用して政策決定者の「意識的な願望は必ずしも本当の願望ではない」と述べた。(U. G. ウェザーリイ, 「デモクラシーと現代の政治体制」PASS, 14, 1920, pp. 23-35.) さらに、F・S・チェーピンは階級とか人種間の葛藤について、それを「自己実現」や「合理化」の作用の抑圧された結果であるとした。(F. S. チェーピン, 「デモクラシーと階級関係」PASS, 14, 1920, pp. 101-110)

しかし、この時期でもっとも貢献のあったのはなんといってもE・R・グローブスであろう。前述の社会学とフロイト理論についての論文(1917)をはじめ、精神分析に関する書物の「書評」活動をとおしてフロイト理論をアメリカ社会学界に紹介したかれの業績は大きい。すなわち、W. A. White's *Principles of Mental Hygiene*, 23 (May, 19188); S. E. E. Jelliffe's *The Technique of Psychoanalysis*, 25 (July, 1919); W. Lay's *The Child's Unconscious Mind*, 25 (Nov., 1919); W. A. White's *Thoughts of a Psychiatrist on the War and After*, 26 (Sept., 1920); W. S. Swischer's *Religion and the New Psychology*, 26 (Nov., 1920) などの「書評」がそれであり、いずれも「アメリカ社会学雑誌」の誌上(カッコ内は掲載日付)であった。かれによると、つぎの三つの点で精神分析の理論は社会学にとって重要な意味をもつという。その三つの点とは、まず第一に、人間の精神的な諸属性というものは精神病患者のそのなかにインテンシブに表現されるというフロイトの考え方によって、そこに普遍的な理論を導き出す可能性をもたらししたこと、第二に、生理学の分野を越えて心理学に人間の心的過程の研究をもち込んだこと、そして第三に、人間の精神をつかむ概念として「願望」(wish)を発見したこと、の三つの点である。⁵⁾かくて、まずフロイトの「願望」の概念が「社会力」説をもつ社会学の伝統のなかに生かされる共通の場がつくられることになった。

さて、W・I・タマスとF・ズナニエッキが有名な『ポーランド農民』(1918-1920)を書いたの

はちようどこの頃であった。ご承知のように、この書物はアメリカ社会学を思弁的な段階から実証的な段階へ進めたということで画期的な意義を有するとされ、その意味で“社会学の古典”、とまで呼ばれた書物である。そして、この書物の第一巻(1918)のなかでタマスが「四つの願望」の概念をはじめて展開し、この概念をおり込んでパースナリティの発達を論じたことは一般によく知られている。(もっとも、この概念はかれの「第一次集団規範の持続性」1917の論文ですでに展開されていた。)そこで、かれの四つの「願望」とフロイトのそれとの関係はいったいどうかということだが、ズナニエツキによると、四つの欲求(desire)を概念化したすぐあとになって、かれはにわかにならばフロイトの「願望」の概念に関心をもつようになった。かれはリビドーの概念を受け入れようとはしなかったが、それまで用いていた欲求の言葉を願望という言葉におき換え、いくぶんフロイト的な分析のやり方で不適応なパースナリティの分析にこの四つの願望を適用するようになったと述べている。⁶⁾しかし書き忘れたが、『ポーランド農民』が公刊される3年前にF・B・ホルトの *The Freudian Wish and Its Place in Ethnic* (1915) という書物が出ておりタマスはこの書物を読まねばならずすでに深く影響されていたのではなからうか、ともいわれている。G・J・ヒンクルは、タマスとフロイトの二つの「願望」の概念のあいだの類似性についてつぎの四つの点を指摘している。すなわち、第一に、ともに目標をもとめる人間の普遍的な性向であるという点、第二に、その内部で、あるいは外部に対して絶えず葛藤をもっているという点、第三に、適応行動には感情的な要因が含まれているという点、そして第四に、絶え間ない葛藤というもの個人進化や社会変化の源泉(source)であると考えられた点、の四つである。⁷⁾タマスの四つの願望とは、(1)新しい経験をもとめる欲求、(2)認知をもとめる欲求、(3)感情的反応をもとめる欲求、および(4)安全をもとめる欲求をいうのであるが、この四つの願望のうち、かれは(1)・(4)を「態度」の側(個人的側面)に、(2)・(3)を「価値」の側(社会的側面)にそれぞ

れ位置づけた。ちなみに、この二分法は、のちにパースンズが五つの「型相変数」(pattern variables)を動機志向的な側面と価値志向的な側面に分けるという、いわゆる“symmetrical asymmetry”をつくる基礎となった図式ではなからうか。また、R・E・パークとF・W・バージェスは『社会学の科学への序説』(1921)という書物のなかで、このタマスの四つの願望の概念を賞揚しつつ、さらに前述のホルトの論文(1915)を援用することによって願望の概念をフロイトのリビドーの概念に沿って規定し、それと態度(attitude)との関係を明らかにした。パークとバージェスのこの書物は、社会学としてはフロイト理論を導入した最初のテキストブックであったとされている。⁸⁾

ところで、フロイト理論とアメリカ社会学について語る場合、いま一つ、1918年頃までのW・F・オグバーンの果たした役割を看過すわけにはいかない。かれはコロンビア大学の大学院に在学中、当時クラーク大学にきていたF・ボアスからフロイト理論について聴いたし、また、A・ゴールドデンワイザーの私宅の研究会にも出席し、L・ローウィンの *S. Freud, Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie*, (1905) についての発表を聴いたこともあった。これはともに1910年頃のことであった。かれがフロイトの精神分析に積極的に興味をいだいたのは1913年頃から1918年——T・ブロウの“dialectic psychoanalysis”を知った頃——にかけてであったが、それはコロンビア大学から学位をえたのち、おもにオレゴン州ポートランドのリード・カレッジの教授として過した時代であった。そして、アメリカの著名な労働経済学者、C・H・パーカーがかれからはじめてフロイト理論について学んだというのはこの時代のことであった。パーカーは古典経済学者にみられるような人間の合理性への信仰を否定し、労働者の争議やストライキをフロイトの神経症の立場から説明して「産業精神病」の理論を展開したことは有名である。(C. H. Parker, “California Causal and His Revolt,” *Quarterly Journal of Economics*, 30, Nov., 1915) フロイトの翻訳家

で著名な A・A・ブリルによると、「オグバーン教授は、わたしの知るかぎりでは社会学の講義でフロイト理論の価値を最初に認めた社会学者であった」と述べている。⁹⁾

2

社会学者のあいだでフロイト理論が最初に公認されたのは第一次大戦後の 1920 年のことである。すなわち、この年の 12 月にワシントンのコロンビア特別区で開かれたアメリカ社会学会の第 15 回 年次大会で “精神分析の心理学の社会学的意義” というテーマのもとにラウンド・テーブル・ディスカッションの一部会がもたれた。おもな参加者の顔ぶれは、E・A・グローブズ、W・A・ホワイト、E・R・シュポールディング、P・ブランチャード、C・A・ロビンソン、それに R・A・パータースの各教授であった。バージェスの言葉によると、これは “first official recognition of psychoanalysis by sociologists” であったということである。¹⁰⁾ そして、この翌年にはフロイト理論を導入した最初の社会学のテキストブック（パーク・バージェス共著『社会学の科学への序説』, 1921）が出ている。これについてはすでに述べた。ついでにフロイトの著作の翻訳という点からフロイト理論の普及状況を知ると、1917 年から 1923 年にかけて The History of the Psychoanalytic Movement (1917); Wit and Its Relations to the Unconscious (1917); Thoughts for the Times on War and Death (1918); Totem and Taboo (1919); Selected Papers on Hysteria and Other Psychoneuroses (1920); Dream Psychology; Psychoanalysis for Beginners (1921); Beyond the Pleasure Principle (1922); Group Psychology and the Analysis of the Ego (1922); Introductory Lectures on Psychoanalysis (1923) などの九つの英訳が出版されている。

ところで、フロイト理論が公的に認めた事情には、第一次大戦後、The True Story Magazine の告白文学によって代表されるように娯楽や恋愛

や性的刺激が公然とも認められ、「性」の問題がタブー視されなくなった一般的背景がものをいっただであろうし、また、この時期は、かつてのプロテスタントの倫理からレジャーの倫理へ、「公衆」に対して「大衆」という非合理的な人間像が生まれるある意味で過渡の時期でもあった。そのほかにフロイト理論が公的に認められるにいたった社会学内部の事情を考えると、(1) 第一次大戦後に古い世代が交代し、アメリカ社会学会の主導権が東部から中西部の若い世代の学徒に移ったこと、(2) 社会学の研究対象の特殊化の必要が強く呼ばれ、当時アメリカ社会学会の会長であった E・C・ヘイズの提案で、社会学会大会が年次別の統一的な研究課題から各自のもつ興味や関心を本位に新しい方針で運営されるようになったこと、(3) 同時に、社会諸科学のあいだの共同研究の必要から隣接諸科学への関心が非常に高まってきたこと、たとえば、社会科学研究協議会 (1923) やイェール大学の人間関係研究所 (1928) の設立など、さらに、(4) 第一次大戦の悲劇によって、戦後の社会学者のあいだではかつての合理性への信仰や社会進歩の概念が失われ、人間の非合理性というペシミズムが一般に支配的になったこと、などの諸事情があげられる。¹¹⁾

かくして、フロイトが社会学の理論のなかにぜんじ浸透していくが、しかしかれの理論はそのまま無条件に受け入れられたとはいいい難い。まず社会学者が批判した概念の一つは、その性の本能についての考え方である。広い意味に解されたとはいえ、性エネルギーは人間行動の決定因としての大切な本能であった。社会学者の批判はここでは性そのものというより、それが従来の本能説と変わるところがないという点である。よく知られているように、この 20 年代の初期は本能説批判の時代であった。たとえば、E・フェアリスが「本能は資料なのか、それとも仮説なのか？」(Amer. J. Sociol. 27, Sept., 1921) の論文で資料 (data) と仮説 (hypothesis) の言葉の混乱を指摘し、本能は客観的な資料ではなく思弁的な仮説であるとしたし、L・L・バーナードの『本能、社会心理学的研究』(1924) の著書は本能批判で余

りにも有名である。かれは従来の多くの学者の著書を検討し、6,113の類型と15,789の個別本能を数えて本能の分類は全く混乱した状況にあることを指摘した。それより前に、かれは「本能と精神分析」(*Journal of Abnormal and Social Psychology*, Jan-March, 1923) でフロイトの性の本能に批判を加えた。ところでこの本能説の凋落とともに、C・H・クーリーやG・H・ミードなどによって社会的相互作用の理論が説かれ、つまり“シカゴ学派の社会心理学”と呼ばれたこんにち的な理論が誕生するのである。少しわき道にそれたが、つぎに社会学者の批判は、フロイトの性的一元論に対して向けられた。E・C・ヘイズが社会学を全面的に科学化するためには一切の一元論を避けるべきだと述べたように、20年代の社会学者の多くは、人間行動の究極の源泉を人間の“psychic nature”のうちにもとめようとする傾向から脱することはできなかったが、それ以外の諸要因を必然的なものとし、両者の相関的な働きに注目するようになって“multi-factor approach”を強く打ち出していた。社会学者の批判は、第三にフロイトを主観主義的であるとする批判である。すなわち、フロイトの精神分析は「患者じしんの過去の経験の想起」と「分析者の主観的な解釈」に全く依存し、したがって“科学”というより“art”ではないか、との批判がそれであった。¹²⁾

それではつぎに、この時期にフロイト理論が社会学の分野にどういった形で受け入れられたかという、それはまず第一に生活史(life history)の方法と結びついてであった。この方法の先駆はすでに述べたタマスとズナニエッキの『ポーランド農民』(1918-1920)であったが、はやくも1921年には、社会学の特殊分野として“生活史と精神分析”の結びつきが認められ、¹³⁾ W・ハーレイは、1923年のアメリカ社会学会の第18回年次大会で、この生活史の方法が社会学の研究に多くの利益をもたらすことを指摘した。すなわち、生活史の方法は個人の行為や精神生活やその内外的条件(遺伝・身体のシツケ・初期の精神経験・教育・家庭生活・生活様式・社会的接触など)についての社会学者の不備な知識を補うのに

最上の方法である、とかれは述べた。そして4年後の1927年の第23回年次大会で、S・A・クインの司会のもとに事例研究法についての特別のラウンド・テーブル・ディスカッションがもたれたことは、この生活史的方法が社会学の研究方法として広く受け入れられてきたことを物語るものであった。また、R・S・キャヴァンは“Topical Summaries of Current Literature: Interviewing for Life-History Material”(*Amer. J. Sociol.*, 25, July, 1929)という論文で、1920年～29年の諸種の文件から文件解題的に75の引用をもとに、社会学・社会心理学・社会事業・精神分析または精神医学の各領域についての生活史的研究のそれぞれの特色を整理した。とくに精神分析との関連でいうと、E・T・クロイガーは個人文書を主観的、純真的、科学的、および告白的の四つのタイプに分け、そして、そのなかで最後の告白的の文書が、いわゆる「浄化」(catharsis)のメカニズムにもとづくもっとも完全な生活記録であると述べた。¹⁴⁾ かかる生活史の方法と精神分析の結びつきは、のちにH・D・ラスウェルが「フロイトのインサイト・インタビューの社会科学への貢献」(*Amer. J. Sociol.*, 45, Nov., 1939)の論文を書いたことによって再び注目されだした。

以上で述べた生活史的研究と関連して、フロイト理論との直接の関係を云々しえないが、いま一つ重要な理論にパーソナリティの発達についての理論がある。この理論は、C・H・クーリー、G・H・ミード、およびW・タマスなどによって代表され、かれらはともにシカゴ学派の社会心理学に属する人たちであった。そのパーソナリティ発達の理論の特色は、社会学的にみれば、社会的相互作用理論を主軸として、こまかい点はともかく、(1)第一次集団(とくに家族)の役割の重視と、(2)文化型相の「内在化」のメカニズムの発見の二つに要約できるとおもうが、この二つは、おもに第一次集団や「鏡に映った自我」の概念(クーリー)“I”と“me”や「一般化された他者」や「他者の役割取得」(taking the role of the other)の概念(ミード)、および「価値」と「態度」の概念(タマス)によって支えられた。そこで、このシカ

ゴ学派の理論を分析してみても、フロイト理論といったいどういう関係があるのかということだが、かれの理論の家族——とくに母子関係——の重視は別にしても、直接の影響の云々ではないが、たとえば、のちにT・パースンズが「超自我と社会体系の理論」(T. Parsons and R. F. Bales, *Working Papers in the Theory of Action*, 1953, 所収)の論文を書いたように、文化型相の内在化のメカニズムは、フロイトの「超自我」の概念を介して、精神分析の理論と社会学の理論を統合する重要な手がかりとなる概念である点をとくに指摘しておきたい。この点については後述しよう。(なお、パースナリティの研究で精神分析と社会学の結合をはかったJ・ダラードの *Criterion of the Life History*, 1936. の好著のあることを指摘しておく。)

そのほか、フロイトの理論が社会学のどの分野で注目されたかということ、家族理論の分野もその一つであった。たとえば、1925年の9月のアメリカ社会学会の第20回年次大会で「家族」の問題がラウンド・テーブル・ディスカッションの regular topic となったのもその一つの現われであった。この時の参加者は、E・W・パージェス、E・R・モウラー、H・モウラー、K・ヤング、L・グローブス、G・ブラウン、T・D・エリオット、F・D・フレイジャー、M・ニムコフなど著名な人たちであった。E・W・パージェスは「パースナリティの相互作用の単位としての家族」(*The Family*, 7, March, 1926) その他の論文で、パースナル・ディスオーガニゼーションは不十分な母子関係からくるものであることを強調したし、家族理論の分野で、社会学と精神分析の理論を統合しようと企てたものに、J・K・フォールサム『家族、その社会学と社会精神医学』(1934)やW・ウォーラーの『家族、動学的説明』(1938)の二つの著作がよく知られている。¹⁵⁾

最後に、フロイト理論が30年代に社会精神医学 (social psychiatry) をとおして社会学に影響を与えている点を指摘しよう。いち早く社会精神医学の諸論文を自己の論文に引用したのはR・ベインの「精神分裂症的文化」(*Sociology and*

Social Research, 19, Jan.-Feb., 1935) だといわれているが、¹⁶⁾ アメリカ社会学会の1932年の第27回年次大会では、T・D・エリオットの司会ですでに社会精神医学の部会がもたれていた。この部会での報告者は、E・R・グローブスとJ・K・フォールサムの二人であったが、前者は「社会精神医学の分野と問題」のテーマで、後者は「社会精神医学の根拠と方法」のテーマでそれぞれ研究報告をおこなった。¹⁷⁾ H・ブルマーが、1937年の「アメリカ社会学雑誌」のあるシンポジウムで社会精神医学者のあいだの理論的一致点をあげているが、それによると、(1)ソーシャル・ディスオーガニゼーションは、パースナル・ディスオーガニゼーションの投影であると考えられている点、(2)解体の状態にある社会体系での社会的相互作用は、自閉的で錯覚的なイメージ——抑圧された無意識の動機をカムフラージュするところの——によって支配されているという点、(3)パースナル・ディスオーガニゼーションは、家族内での幼児期の経験にその原因をもとめることができるという点、したがって、(4)社会の再組織の最上の手段は、幼児のシツケや教育の改革が一番であると考えられている点、の四つをあげている。H・W・ドゥンハムがいうように、¹⁸⁾ 「社会精神医学が一つの分野として発展しつつあるかどうかはなんともいえない」が、その理論は、社会学の特殊領域として、当時のソーシャル・ディスオーガニゼーションの理論に大きな影響を与えたものであった。

3

フロイトは1939年の9月に英国で亡くなった。八十三才であった。この年の11月、「アメリカ社会学雑誌」(vol. XLV, No. 3) はフロイトを特輯し、その内容は、二・三あげると、A・A・Brill, *The Introduction and Development of Freud's work in the United States*; G. Zibboory, *Sociology and Psychoanalytic Method*; E・W・Burgess, *The Influence of Sigmund Freud upon Sociology in the United*

States などであった。また、その翌年には、K・ヤングが「フロイト心理学の社会学への影響」(*American Journal of Orthopsychiatry*, 10, Oct.,) という好論文を発表した。

ところで、このフロイトが亡くなった**1939年**という年は、K・ホルネイが『精神分析の新しい道』(1939)を書いた年でもあった。もっとも、彼女はその3年ほど前に、すでに『現代の神経症的パーソナリティ』(1936)を著わし、精神分析の来しい道を示唆していた。彼女によると、「社会学者や人類学者の業績があげられた結果、最近では、われわれは文化(culture)という問題を単純には考えなくなったが、十九世紀には、文化の相違についての知識がほとんどなく、文明国人たる自己の特質を、一般的な人間性だと考える傾向が強かった。勢い、フロイトは自分が観察した人間、自分が解釈した人間は、世界中に共通なものだと信じていた。彼のこの文化に対する不十分な見方は、彼の生物学的な前提を深いつながりがある。」¹⁹⁾したがって、彼女は「社会的に傾いた見方が、これまでの生理解剖学に傾いた見方に、とって代るのである」と述べた。すなわち、社会的な新フロイト主義の宣言である。これが40年代のフロイト理論の新しい傾向であるが、生物学主義からの解放は、周知のように、社会学や文化人類学や社会心理学の領域で多くの異色ある業績を生んだ。たとえば、新フロイト派のいま一人の驍将であるE・フロムの『自由からの逃走』(1941)はその一つであった。われわれは、A・W・グリーン「ホルネイとフロムの社会的分析」(*Amer. J. Sociol.*, 51, May, 1946)の論文から以上の二人の業績について学ぶことができる。少々よこ道にそれるが、1939年という年は第二次大戦が始まった年でもあった。フロイトは、ナチ・ドイツからの亡命の身で、ロンドンの西北部のハンプステッドというところで亡くなった。この危機のなかで、たとえば、フロムが熾烈な問題意識をもった「自由」の問題を論じたことは注目し、また、F・アレキサンダーの『理性なき現代』(1942)もこの意味で重要であるとおもう。

さて、かかる社会不安を反映して、ソーシャル・ディスオーガニゼーションの理論が、30年代から40年代にそのまま受け継がれるのである。世界危機・制度的構造の矛盾・価値の葛藤など、精神分裂症的文化においては、個人の不適応や神経症が一般に増加し、それがソーシャル・ティスオーガニゼーションの大きな原因であるというものであった。社会的に興味のあるものを一・二あげると、R・E・L・ファリスとH・W・ドゥンハムは神経症の地域差や生態学的分布について研究したし(フェアリス・ドゥンハム共著『都市地域における精神的疾患』1939)、また、A・グリーンはその論文「中産階級の男児と神経症」(*Amer. Sociol. Rev.*, 11, 1946)で、幼児の社会化の過程に中心をおいて中産階級と神経症の問題を論じた。最近では、H・A・プロッホが *Disorganization ; Personal and Social*, (1952)の書物を書いているが、それによると、現代社会のように変化が激しいと、幼児期の経験一以前の社会状況との適応一からえた行動様式が「潜在的要素」となって新しい社会状況と矛盾し、それがソーシャル・ディスオーガニゼーションのもっとも大きな原因の一つとなっているのではないか、というのである。

つぎに、純粹に社会学の分野ではないが、30年代の後半から40年代にかけて発達した重要な理論に「文化とパーソナリティ」の理論がある。よく知られているように、新フロイト派の一人、A・カーディナーが『個人とその社会』(1939)という有名な書物を書いたのは1939年であった。「文化とパーソナリティ」という言葉そのものは、1930年頃にH・ブルーナーが“privacy and social order”と同義的に用いたのが最初であるとされているが、つづいて、E・ファリスが「バンツ族の文化とパーソナリティ」(*PASS*, 28, May, 1934)についての論文を書いた。しかし、フロイト理論との関係を云々する場合、まずカーディナーの業績をあげるのが妥当であろう。すなわち、カーディナーは、文化と育児法との関係を重視し、パーソナリティ発達の順序として「育児法→基本的パーソナリティ構造→投射的

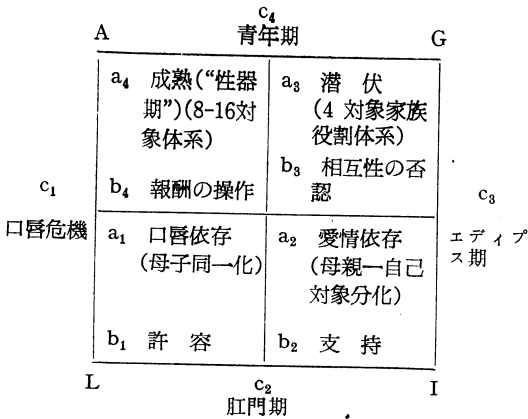
体系→現実的体系」を概念化した。これは余りにも有名である。かれはそのほか、『社会の心理学的辺境』(1945)を書いたが、同じ年、文化人類学者で著名なR・リントン——カーディナーの共同研究者でもあった——は『パースナリティの文化的背景』(1945)一邦訳、『文化人類学入門』, 創元社, (1952)一の名著を出版した。第二次大戦の終わった年であった。前述の基本的パースナリティ構造とともに「ステイタス・パースナリティ」の概念は社会学的にも有用である。²⁰⁾ (なお、M・ミートやR・ベネディクトなどの諸業績を無視するわけにはいかないがここでは割愛する。) そのほか、G・J・ヒンクルが指摘しているように、²¹⁾ マス・コミュニケーションの分野では、H・ラスウェルがその「内容分析」で精神分析的なインタビューの方法を利用しているし、最近では、H・ゴールドハーマーが、「世論とパースナリティ」(Amer. J. Sociol., 55, Jan., 1950)の論文で、世論形成の研究に「退避」や「転位」などの概念を使用している。また、ニグロ問題の領域では、J・ドロードやA・ディヴィスがニグロのパースナリティを“欲求不満—攻撃,” 説から説明しているし、A・ローズとC・ローズは、America Divided (1950)の著書で人種的偏見を研究する場合、現代心理学のなかで精神分析の理論のみが役に立つことが証明された、と述べている。

しかし、フロイト理論がもっとも影響を与えた社会学の分野はパースナリティ発達=家族の理論の分野ではなからうか。すでに述べた社会心理学や(フロム)文化人類学(カーディナー, リントン)との結合もその一つであったが、最近の家族の理論を眺めてみると、たとえば、E・W・バージェスとH・J・ロックは、その『家族』(1953)で、前述のタマスの願望理論を採用し、それをフロイトの「心理発生過程」(昇華・欲求不満・同一化・異化・保護過剰・投射・自己表現・代償など)で説明することによって家族「心理劇」——すなわち、家族内の感情的相互作用——を記述しているし、また、R・F・ウインチは『現代の家族』(1952)の書物で、G・H・ミードの社会的行動主義(グラードやミラーの新社会的行動主義を含めて)とフロイ

ト理論(新フロイト派を含めて)とを結合し、それによって“統合的なパースナリティの社会心理学、の構想をしめているが、かれによると、パースナリティの型は幼児期の経験によっておもに決定されるとし、その意味で家族を基本的社会制度と呼んでいる。幼児期の行動は、いわゆる「幼児愛」(infantile love)へ導く“緊張—低減,”の生物・身体的レベルがおもであるが、それにつづく学習は、その集団の価値や規範を内在化させる。したがって、家族はパースナリティの個人的側面とその社会の文化的型相をうまく結合するところの重要な社会状況であるというのである。さらに、パースナリティはR・F・ベイルズとの共著で『家族、社会化と相互作用過程』(1955)を著わしているが、とくにその第二章の「家族構造とコドモの社会化」で行為理論とフロイト理論を結びつけることによって「社会化過程」の局面=型相を図式化することを試みている。それをやや詳しく紹介しておく、(1)社会化の過程(パースナリティ発達の順序)は、ここでは詳しく述べられないが、ベイルズの考えた「課題逐行」の逆の順序(L→I→G→A)で展開されること、²¹⁾ (2)この社会化の過程の局面=型相は二つのタイプ、すなわち、相対的な安定の局面(a₁-a₄)と転換(過渡)の局面(c₁-c₄)の二つから構成されていること、および(3)この社会化の過程は、理論的に、社会的相互作用をとおしての「社会的役割対象の内在化」というふうにミード的な役割取得の概念が利用されていること、などをあらかじめ予備的な知識とし、つぎにフロイトの用語を用いて²³⁾——

まず胎児は、母胎内の安定の局面から分娩——これはパース・チャンネルをとおる時の異常な緊張と新しい環境との生理学的な相互作用(呼吸・栄養摂取・排泄)のメカニズムが急に活動を開始するという二つの意味において「出産外傷」である——によって乳幼児(口唇依存a₁)となるが、この最初の転換の局面は口唇危機(c₁)と呼ばれるものである。かくて口唇危機を経て口唇依存の相対的な安定の局面(a₁)に移るが、この口唇依存は「社会的対象」——とくに母親への「愛着」がその大きな特色である。この時期ではまた幼児は母

親の所有物でもある。いわゆる「母子同一化」(mother-child identification) がそれである。



(注) a (1—4) 心理・性的発達局面
 b (1—4) 学習・社会統制過程の局面
 c (1—4) 転換(過渡)期

ここでは自我意識は未だなく母親と自己が同一視されているが、この関係がうまくゆくことは、のちにパースナリティが安定するための第一の条件であるといわれている。やがて、母親=対象の内化が進行して、“you”(母親の“イメージ”)と“me”(自己)が分化しはじめるが、その契機は排便のシツケ(sphincter-control)である。この不満な転換の時期は肛門期(c_2)と呼ばれる。この肛門期を経て相対的な安定がつづくが、これは愛情依存の時期である。この愛情依存は口唇依存の時の「同一化」とはちがって少なくとも“me”が分化している点で本当の意味での対象への愛着(true object-attachment)であるとされる。しかし、この場合の愛着の対象は相変らず母親なのである。この意味で、この母子体系は社会的には2役割体系の社会的相互作用として概念化されるのである。ところが、この社会的相互作用をとおして社会的役割対象の内化がさらに進むにつれ、前段階の“you”が「母親」と「父親」の二つに分化し、その“me”も「自己」と「兄弟姉妹」の二つに分化するのである。この分化の契機はエディプス・コンプレックスで代表される過渡の局面(c_1)であって、やがて4役割単位の家族体系ができ上るのである。これは時期としてはフロイトのいう潜伏期で家族依存の相対的な安定の局面(a_3)である。最後に、この家族依存を放棄して

家族外の体系(extra familial system)への参加によって愛着の独立が迫られるが、これは一般に青年期(c_4)と呼ばれている。フロイトが成熟(「性器期」と呼んだのはこの転換の過程のノーマルな結果に名づけたものである。ここではパースンズは、8—16役割=単位の体系を型相変数の組合せで図式化するが、²⁴⁾社会学理論としては未だ完成されたものとはいえない。なお、社会統制の過程(b_1 — b_4)は、まず欲求=性向の表示を全面的に許容(b_1)し、つぎに、もっとも低いレベルの規範に従うことに“たとえ失敗したとしても、支持(b_2)を与える。かくて規範の正統化をはかり、他方では欲求=性向に制限を加えて相互性の否認(b_3)を行い、最後に規範の遵守に対しては報酬の操作(b_4)によって社会的承認を与え、社会体系の存続や維持をはかるというものである。

以上、余りにも粗雑で目的が十分果されなかったが、終りに、パースンズの**行為の一般理論**にフロイトの理論がどう貢献しているのかをごく簡単に指摘する²⁵⁾ことでこの論文の結びに代えたいとおもう。まずこの点についてかれの著作から若干ぬき書きしてみると、たとえば、「超自我の形成についてのフロイトの仮説は**価値型相の内化を広く周知させた。それはわたしたちの場合にも戦略的にもっとも重要である。**」「……パースナリティへの価値の内化は、社会体系への制度化を直接対応するものである。すでにみたように、この二つのものは、実際には同じものの二つの側面にほかならない。この**価値型相の内化と制度化は、フロイトとデュルケムによって別個に、それぞれちがった立場から発見された観点であるが、行為理論の多くの理論的な中心問題の焦点なのである。**」²⁶⁾(附点・引用者)この引用で行為理論におけるフロイトの位置というものがだいたいわかるとおもうが、以下これについていまいし説明を加えよう。

パースンズによれば、社会体系というのは、「社会的—文化的レベルにおける、二人もしくはそれ以上の<行為者>のあいだでおこなわれる、なんらかの相互作用の過程によって生ずる体系の

ことである。行為者は、具体的な人間的個体（個人）であるが、あるいは複数の個人をその成員とする集合体であるかのいずれかである。個人あるいは集合体は、所与の相互作用の体系に、かならずしもその個人あるいは集合体の〈性質〉、動機ないしは関心の全集合をもって参与するものではなく、この特定の相互作用の体系に適合する一扇面 (sector) のみをもって参与する。われわれは、社会学的にこのような扇面を役割 (role) と呼んでいる。」²⁷⁾ この文脈をよく検討してみると、パースンズには社会体系の単位は役割であるという考え方が一方にあるから、社会体系とパースナリティ体系とは、役割というものを介して、相互滲透の関係で考えられていることが意味される。すなわち、「社会体系とパースナリティ体系とのあいだの境界は、相互依存というより相互滲透的である。社会体系の単位は役割である。しかし役割は、パースナリティの部分である」というのである。²⁸⁾ ところで、この考え方には30年代から40年代にかけての社会心理学や文化人類学の影響が大きいが、その考え方のソースをかれの著書から直接たどってみると、たとえば、『家族』(1955)にみられるように、かれじしん、これをG・H・ミードの社会的相互作用理論、つまり「他者の役割取得」説——“I”と“me”の概念の展開——から学んでいるのではなからうか。もちろん、ミード理論そのまっというのではない、パースンズはその役割取得の理論を、さらにフロイトの「超自我」の概念とそれにかれが『社会的行為の構造』(1937)で展開している、デュルケムの後期の立場、いわゆる例の「社会は諸個人の精神のなかにのみ存在する」というアフォリズムと結びつけ、文化的型相の「内在化」のメカニズムに関する、〈内在化〉と〈制度化〉の二分法を提出して行為の一般理論の基礎的な概念図式をつくり上げた。すなわち、これをもとにして、社会と文化とパースナリティの三者を統合的に把握するその手がかりにしようとしたのである。なお、パースンズは前にあげた「超自我と社会体系の理論」(1953)において、超自我の概念が、パースナリティに関する精神分析の理論と社会体系に関する社会学の理

論とを結びつけるのにじつに有効な概念であると述べ、同時にフロイトの超自我の概念を比較される、前述のデュルケムの後期のアフォリズムをそれと共通の理論的な場においた。そして、この二つの概念をミードの社会的相互作用の理論——“me”および「一般化された他者」——に結びつける²⁹⁾ ことで新しく「社会的役割対象の内在化」の言葉をもって概念化したのである。これが社会化の過程 (L→I→G→A) の展開の基礎になったことについてはすでに述べた。

- 註1) 最近の研究では、G・J・ヒンクルの “Sociology and Psychoanalysis,” in H. Becker and A. Boskoff, (eds.), *Modern Sociological Theory*, 1957 の論文はもっともすぐれている。本稿はこの論文に全く負うところが多い。なお、彼女は “The Role of Freudianism in American Sociology” (1951) でウィスコンシン大学から Ph. D. の学位をえた。そのほか、H. ハートマンの “Psychoanalysis and Sociology,” in S. Lorando (ed.), *Psychoanalysis Today*, 1950 の論文がある。
- 2) G. S. Hall, *Life and Confession of a Psychologist*, 1923, p. 332.
- 3) “Psychoanalytic Theory and Its Applications in the Social Sciences,” in G. Lindzey (ed.), *Handbook of Social Psychology*, vol. I, 1954, p.172. (邦訳、みすず書房, 1957)
- 4) G. J. Hinkle, *op. cit.*, pp. 575ff.
- 5) E. R. Groves, “Sociology and Psychoanalytic Psychology: An Interpretation of the Freudian Hypothesis,” *Amer. J. Sociol.*, 23 (July, 1917,) pp. 107-116.
- 6) G. J. Hinkle, *op. cit.*, p. 581.
- 7) *Ibid.*, p. 581.
- 8) E. W. Burgess, “The Influence of Gigmund Freud upon Sociology in the United States,” *Amer. J. Sociol.*, 45 (Nov., 1939), p. 365.
- 9) A. A. Brill, “The Introduction and Development of Freud’s Work in the United States,” *Amer. J. Sociol.*, 45 (Nov., 1939), p.325.
- 10) E. W. Burgess, *op. cit.*, p. 364.
- 11) G. J. Hinkle, *op. cit.*, pp. 358-359.
- 12) E. W. Burgess, *op. cit.*, pp. 358-359.
- 13) “A Tentative Scheme for the Classification of the Literature of Sociology and the Social Sciences,” *Amer. J. Sociol.*, 27 July, 1921, pp. 128-129.
- 14) E. T. Kreuger, “Technique of Securing Life History Document,” *Journal of Applied Sociology*, 9(March-April, 1925), pp. 290-298.

- 15) E. W. Burgess, *op. cit.*, p. 368.
- 16) また R・ベインは "Sociology and Psychoanalysis," *Amer. soc. Rev.*, 1 (April, 1936) の論文を書いている。
- 17) *Amer. J. Sociol.*, Dec., 1932.
- 18) H. W. Dunham, "Social Psychiatry," *Amer. soc. Rev.*, 13 (April, 1948), pp. 183-197.
- 19) K・ホルネイ, 井村・加藤共訳, 「精神分析の新しい道」日本教文社, 1952, 27頁。
- 20) カーディナーやリントンと, ホルネイやフロムとのあいだのアプローチの違いについては, S. S. Sargent, *Social Psychology, An Integrative Interpretation*, 1950, pp. 67ff. 参照。
- 21) G. J. Hinkle, *op. cit.*, pp. 599-600.
- 22) T. Parsons, R. F. Bales, and E. A. Shils, *Working Papers in the Theory of Action*, 1953, pp. 63ff.
- 23) T. Parsons and R. F. Bales, *The Family, Socialization and Interaction Process*, 1956, pp. 35ff.
- 24) *Ibid.*, pp. 50ff.
- 25) この点については, さらに拙稿, 「行為者一状況」図式に関する研究ノート, ソシオロジ, 第6巻, 第4号, 1959, 26-40頁参照。
- 26) T. Parsons and E. A. Shils, *Toward a General Theory of Action*, 1951, p.67 or 240. (永井・作田・橋本訳, 日本評論新社, 1960, 108頁および386頁)
- 27) T. Parsons and N. J. Smelser, *Economy and Society, A Study in the Integration of Economic and Social Theory*, 1956, p. 8. 富永訳 I, 岩波書店, 1959, 15頁)
- 28) T. Parsons, "Sociocultural and Personality Systems," in Rey R. Grinker (ed.), *Toward a Unified Theory of Human Behavior*, 1956, p. 339.
- 29) フロイトとミードの関係については, L・P・ホルトの *Psychoanalysis and Social Process (Doctoral dissertation, Radcliffe College, 1949)* の論文がすぐれている。また, H・ガースと C・W・ミルズもパースンズとは若干ちがった立場からではあるが, 「われわれは, ミードの一般化された他者の概念とフロイトの超自我の概念一両者のもっとも密接な接触点—によって個人的なもの、社会的なもの、すなわち、個人の内的行為と広汎な社会・歴史的現象を結びつけることができる。」またじじつ, 「超自我や一般化された他者に関する研究は, こんにち, われわれの研究の growing edge にある。というのは, かかる概念によって, われわれは個人の奥深い特性と広いパースペクティブにおいて存在する諸事実とを結びつけうるからである」と述べている。(H. Gerth and C. W. Mills, *Character and Social Structure, The Psychology of Social Institutions*, 1954, preface, IV, xx-xxi)